

「雪の花」

黒猫
千鶴

廊下を走る音。
病室のドアを勢いよく開く音。

雪斗「花奈！」
看護師1「こら！」

手で軽くおでこを叩く音。

雪斗「いてっ！」
看護師1「廊下は走らないって学校で習わなかった？」
雪斗「あ……すみません」
看護師1「まったく……（溜め息混じりに）」

病室のドアから開閉の音。

花奈「怒られて……学習しないんだから」
雪斗「うるっせーな！」
花奈「まったく……」
雪斗「あ、また読んでんのか？」
花奈「うん……いつか行きたいと思って」
雑誌をめくる音。
雪斗「北の大地ツアー特集、ねえ」
花奈「雪斗は函館のクリスマスファンタジーって……知ってる？」
雪斗「いや？ 函館に行ったことねーからなあ」
花奈「外国から届く大きなクリスマスツリーが海の上にあって……綺麗なんだって」
雪斗「ふーん……じゃあ、行こうぜ！」

花奈「え？」
雪斗「え？ じゃなくて、行こうぜ！ 俺と花奈の二人で！」

花奈「でも……いつになるかわかんないよ？ 私が退院しない限り行けないし……」

雪斗「すぐ退院出来るって！」
花奈「でも……」

雪斗「大丈夫だって！」
花奈「雪斗……」

雪斗「あ！ ごめん、手いきなり握ったりして（申し訳なきそうに）」

花奈「ううん。ただ……寂しいと思っただけ」
雪斗「花奈……」

窓から風の音。

花奈「最近、寒くなったんだって？ 風邪とか……気を付けなよ？」
雪斗「おう！ 俺はちよつとやそつとじゃ風邪なんてひかねーよ！」
花奈「そうだね……馬鹿は風邪ひかないって言うもんね（くすくす笑う）」
雪斗「それはあれか？ 俺が馬鹿だって言いたいのか？」
花奈「馬鹿とは思ってないよ……ただちよつとおつむが弱いとは思ってるけど」
雪斗「同じことじゃねーか！ どうせ俺は身体が丈夫しかとり得ねーよ！」
花奈「身体が丈夫なのは……いいことだよ（少し切なげに）」

雪斗「あ……ごめん」
花奈「（間をあげてから）気にしないでいいよ」

窓から風の音。

花奈「ねえ……雪斗」
雪斗「ん？」

花奈「雪の花って……知ってる？」
雪斗「雪の花？ なんだ、それ」

花奈「夏に……咲くんだったって」
雪斗「雪って名前なのにか？（小馬鹿にした感じに）」

花奈「夏なのに氷点下になる時があるんだって……その日、その瞬間にだけ咲くの」

雪斗「ふーん……それが？」

花奈「その花は雪で出来てるみたいに、白くて……冷たいんだって」

雪斗「それは見てみてーな！ どこに咲くんだけ？」

花奈「藻岩山……それも結構、奥深いところみたい」

雪斗「へえ……」
花奈「見てみたいな……雪の花」

雪斗「は……」

雪斗の声を遮るように風が吹く音。

雪斗「風が冷えてきた。（間をあげてから）窓、閉めるぞ」

花奈「うん、ありがとう……」

窓を閉める音。

人の話し声（沢山の野次馬がいる的な感じの）。

廊下を歩く音。

医者「やあ、雪斗君」

雪斗「あ、先生」

医者「毎日、花奈ちゃんのお見舞い御苦労様だね」

雪斗「来たくて来てただけなんで」

医者「一途だねえ」

雪斗「なな、何言ってるんですか、先生……そんなんじゃないですから！」

医者「そうか、そいつは悪かったね（くすくす笑う）」

雪斗「からかわないでくださいよ！」

医者「青春してる若者を見るとからかいたくなっちゃうんだよね」

雪斗「（間を開けて）そんなことはないです、先生は花奈を助けてくれたじゃないですか」

医者「……雪斗君、ちよつと時間あるかい？」

雪斗「はい、ありますけど」

医者「じゃあ、ちよつと話をしないかい？……花奈ちゃんのことです」

廊下を歩く音。

前を歩く人について歩く音。

草木が揺れる音。

しみりとした感じの曲。

医者「手術は成功したことは知ってるよね？」

雪斗「はい、先生が執刀してくれたから……」

花奈は今も俺の前で笑ってくれてます」

医者「でも、前より減ったんじゃないかい？」

雪斗「それは……（最後の方が聞こえなくなる）」

医者「気を使わなくていいよ。入院する前より減ったと僕を感じるんだ、幼馴染の君が感じない訳ないよ」

雪斗「ん……（申し訳なさそうに）」

カラスの鳴き声。

医者「もうこんな時間か……最近では冷えるからね、気を付けて帰るんだよ？」

雪斗「先生！」

医者「どうしたんだい？ 雪斗君」

雪斗「花奈の感覚は……感覚はいつ戻るんですか？」

医者「（間をあけてから）わからないんだ」

雪斗「わからない、って……」

医者「手術は成功した。それなのに、どうして皮膚感覚だけが戻らないのか」

雪斗「（力強く）花奈は！俺が手に触れたことも、手の温かさも、風の冷たさも！（小さく）わからないんですよ……」

医者「そうだね……本当に花奈ちゃんには申

し訳ないと思うよ。僕が力不足なばかりに、

そして雪斗君にも」

雪斗「ちよ！先生……そんな、頭を上げて

くださいよ！」

医者「いや、これは僕の力不足だ……」

雪斗「上げてくださいってば！」

医者「雪斗君……」

雪斗「頭を下げるくらいなら……どうすれば花奈の感覚が戻るかを考えてください」

医者「そうだね……全く、その通りだ……」

風が吹く音。

医者「雪斗君……」

雪斗「なんですか？」

医者「これはまだ花奈ちゃんには言っていないことなんだけどね」

雪斗「はい」

医者「今までは投薬でどうにかしようと思っ

てたけど、ちよつとした強硬手段に出よう

かと思ってるんだ」

雪斗「強硬、手段？」

医者「何か強い刺激を与えれば、花奈ちゃんの眠っている皮膚感覚が戻るんじゃないかって思うんだ」

雪斗「……言ってる意味が、わかりません」

医者「んー、何て言えばわかるかな？」

雪斗「先生……（小さい声）」

医者「強い刺激と言っても彼女の身体に傷をつけようとかじゃないよ。ちよつと冷水に

手を長時間つけてもらうとか、熱湯につけたタオルなんかを腕にかけて様子を見るって感じ……」

雪斗「話を遮るように先生！（叫ぶ）」

草木がざわつく音。

雪斗「そんなこと……花奈が了承したって俺は許さねーよ！」

医者「雪斗君……」

雪斗「そんなこと……絶対に（呟くように）」

医者「話を遮るようにじゃあ、雪斗君は何かい案でもあるのかい？」

雪斗「なんだって……？」

医者「今のままじゃ彼女は外に出ようとしな。皮膚感覚が戻らないだけで！ 悪いところは僕が治したんだ！（少し狂った感じに）」

雪斗「あんたは……花奈の気持ちを考えたことがあんのかよ！（叫ぶ）」

医者「僕に突っかかってきて、彼女の皮膚感覚が戻るのかい？」

雪斗「それは……（奥歯を噛み締める感じ）」

医者「手を、離してくれるかい？」

雪斗「（舌打ち）」

服を直す音。

医者「まあ、この案はあくまでも強硬手段だよ。今すぐやる訳じゃないから」

草の上を歩く音。

雪斗「先生！」

草の上を歩く音が止まる。

雪斗「雪の花って……知ってますか？」

医者「間をあげてから聞いたことはあるよ。確か、藻岩山の奥深くに咲くとか」

雪斗「本当にあるんだ。花奈の妄想じゃなかったんだ……（呟く感じに）」

医者「でも、雪の花は夏で氷点下になる時にしか咲かないから見たことないよ？（笑いながら）」

雪斗「その花は冷たいんですね？」

医者「え？ まあ、雪ってつくんだから……冷たいんじゃないかい？」

雪斗「……わかりました、ありがとうございます！」

草の上を走る音。

医者「ちょよ、ちょっと！ 雪斗君！」

草の上を走る音が止まる。

医者「まさか君、雪の花を探しに行くつもりかい!？」

草の上を歩く音。

雪斗「はい」

医者「そりゃ最近、寒くなってきたからもしかしたら咲くかもしれない。でも、雪の花ってのは御伽噺みたいなものなんだよ。実際に見た人は少ないんだから……」

雪斗「話を遮るように）少ないだけでしよう？」

医者「氷点下になった時に素人が山に入ればどうなるかなんて、高校生の君ならわかることだろう！」

雪斗「……離してください」

医者「雪斗君！」

雪斗「わかってんだよ！」

腕を掴んでいる手を振り払う音。

雪斗「わかってんだよ、そんなこと……でも、花奈が寂しそうに外の話をする姿はもう、見たくねーんだよ……（最後の方が小さくなる）」

医者「雪斗君……」

雪斗「先生。俺しばらく見舞いに来れないと思います。花奈には受験勉強で忙しいから、って言うておいてください」

草の上を歩く音。

台車を押す音。

病室のドアをノックする音。

花奈「はい……」

病室のドアから開閉の音。

看護師2「点滴交換の時間よー」

台車を押す音。

花奈「あの……」

看護師2「ん？」

点滴の準備をする音。

花奈「今日は雪斗……見てませんか？」

看護師2「あー、いつもお見舞いに来てくれる男の子よね？　そう言えば、最近見かけないわね……」

花奈「そう……ですか（寂しそうに）」

看護師2「彼女を放っておくなんて、罪な男ね（くすくす笑う）」

花奈「そんなんじゃないです」

看護師2「あら？　そうなの？　ごめんない、てつきりそうなのかと」

花奈「雪斗には……身体の弱い子は合いませんから……」

看護師2「そんなこと……」

話を遮るように病室のドアから開閉の音。

医者「はーなちゃん！」

花奈・看護師2「先生……」

医者「君はいいよ。あとは僕がやっておくから」

看護師2「わかりました。じゃあね、花奈ちゃん。次の検診の時間に」

花奈「はい……」

台車を押す音。

病室のドアから開閉の音。

医者「気分の方はどうだい？」

花奈「いつも通りです……特に変わったところはない……」

医者「（話を遮るように）そっか」

裾を捲る音。

医者「ごめんね。うちの看護師達、点滴が下手で（乾いた笑い）」

花奈「あ、いえ……大丈夫……」

医者「（話を遮るように）あとで氷嚢を持ってくるように言っておくよ」

花奈「はい……（申し訳なさそうに）」

医者「はい、終わり」

花奈「ありがとうございます……」

医者「元気ないけど……雪斗君が最近、顔見

せないのと関係、あるのかな？」

花奈「それは……（最後のほうが小さくなる）」

医者「心配しなくていいと思うよ。雪斗君、受験勉強で来れないって言ってたから」

花奈「そう……なんですか？」

医者「うん」

花奈「それなら……いつもみたく、ここで勉強すればいいのに……」

医者「今回は自分の力でいい成績出して、花奈ちゃんを驚かせるんだー、って意気込んでたから……花奈ちゃんの前で勉強しづ

らいんじゃないかな？（笑いながら）」

花奈「雪ちゃんらしいなあ……（小さな声でくすくすと笑う）」

医者「ふふ……」

花奈「どう……したんですか？」

医者「いや、似た者同士だなんて思ってたさ」

花奈「私と……雪斗がですか？」

医者「うん」

花奈「私は雪斗程……おつむは弱くないです」

医者「そこじゃないよ（くすくす笑いながら）」

花奈「じゃあ……どこが？」

医者「互いに心配し合ってるところ、かな？」

花奈「心配……し合ってる……」

医者「いや、なんでもないよ。変なこと言っ

て悪かったね」

切ない系の曲。

花奈「あの、先生……」

医者「ん？」

花奈「雪斗は……受験勉強でこれないんです

よね？」

医者「そうだと、言ってたよ？」

花奈「そう……ですか……」

医者「じゃあ、また検診の時間に」

花奈「はい……」

病室のドアから開閉の音。

医者「雪斗君。彼女が寂しくなるってわかって取った行動は……正しいのかい？」

廊下を歩く音。

窓から風の音。

花奈「雪ちゃん……受験勉強の合間にも、来てくれないの？」

窓から木がざわつく音(ざわざわ)。

病室のドアから開閉の音。

由香利「やつほー。花奈、元気してるー？」

楽しいアップテンポの曲。

花奈「由香利……久し振り」

由香利「良かった、元気そうで！」

丸椅子を引きさずる音。

由香利「よいしょっと」

花奈「今日は……どうしたの？」

由香利「はい、これ。今回の受験の問題用紙と回答！」

花奈「ありがとう……でも、どうして由香利

が？ いつもは雪斗が自分の答え合わせと

一緒に持ってくるのに……」

由香利「なーに？ たまにはあたしが持って

来たのがそんなに不服ー？」

花奈「そんなじゃ……ないってば(困った感じに)」

由香利「あはは！ (笑いながら) 冗談だつてば！」

花奈「由香利ってば……」

由香利「雪斗の奴がさー、風邪で学校休んで」

花奈「え？」

由香利「あいつは馬鹿だから風邪はひかないと思つてたからビックリだよ、ほんと！

だって馬鹿は風邪ひかないっていうじゃない？ 身体だけは丈夫だと思つてたけどさ

……それで受験受けなくて、狡いよねー」

花奈「受験……受けてないの？」

由香利「え？ うん、二週間前から休んじやつてさ、クラスでは花奈のところに住み込んでんじやないかって、馬鹿な男子がさー」

花奈「二週間前から……(咳くように)」

由香利「花奈？ どうした？ 顔色悪いよ？」

花奈「あの時のお見舞いから……(咳くように)」

に」

由香利「ちよつと、花奈？ おーい、はーな

ー？ どうしたのさー？」

花奈「由香利……雪斗に何かあったのかな？」

由香利「え？ どういうこと？」

花奈「雪斗はこの一七年間……学校休んだことないんだよ！ 身体の丈夫なところしかとり得ないって……自分でも言つてたもの！」

由香利「ちよつと、花奈！ 落ち着いて！」

花奈「何かあったのかな？」 どうしよう、由

香利！」

由香利「待つて花奈！ 落ちるってば！」

ベッドから落ちる音。

丸椅子が倒れる音。

花奈「雪斗……」

由香利「花奈！ 血が出てる！」

花奈「え……？」

由香利「落ちた時に頭打ったんじゃない？」

待つて、今ナースコールを……」

花奈「話を遮るようにうう……、もうヤ

ダよ……こんな身体ア……雪ちゃん……」

ナースコールを押す音。

カラスの鳴き声。

花奈「ん……」

医者「気が付いたかい？」

花奈「先生……？」

医者「ベッドから落ちた時に丸椅子にぶつ

たんだった？ 友達が心配してたよ」

花奈「先生……由香利は……」

医者「友達なら帰ったよ」

花奈「そう……ですか(溜め息を吐く)」

医者「何があつたんだい？」

花奈「間をあけてから」雪斗が……学校に

来てないって聞いて……受験も受けてない

って聞いて私……(鼻をすすする音)」

医者「そっか……」

花奈「(泣きながら)先生は……本当に知らな

いんですか？ 雪斗が……姿を見せなく

なった理由……(鼻をすすする音)」

医者「それは……」

花奈「(泣きながら)知ってるなら……教え

てください……(鼻をすすする音)」

医者「それは……」

花奈「もし……私が原因なら、私……」

医者「話を遮るように」それは違うよ！ 雪

斗君は花奈ちゃんのために……」

勢いよく病室のドアが開く音。

看護師1「先生！」

医者「どうした？」

看護師1「大変です！ 今、急患で運ばれて

来る患者さんなんです……」

医者「患者が？」

看護師1「それが……(口籠る感じに)」

廊下を走ってくる音。

看護師2「先生！ 急患です、お願いしま

す！」

医者「わかった、今行く！」

三人の廊下を走って行く音。

救急車のサイレンの音。

人の話し声(沢山の野次馬がいる的

感じの)。

看護師3「昨日、運ばれてきた患者さん……

七〇五号室にいつも顔出してた男の子らし

いじゃない？」

看護師4「藻岩山で倒れてるところを登山客

に発見してもらったみたいよー」

看護師5「学校休んで、お見舞いにも来ない

で登山ー？」

看護師3「あれじゃない？ 学校とかお見舞

いとかに疲れたってやつじゃない？ 最近

多いし」

看護師4「そういう患者つてめんどうなのよ

ねエ、どう接していいかわからないし」

看護師5「しっ！」

看護師3・4「あ……」

花奈「こんにちは……」

花奈「雪斗の様子を……」

看護師5「そ、そう……気を付けてね？」

花奈「はい……」

ゆつくりと歩いて行く音。

看護師5「ビックリしたー。あの子、音もな

く現れるんだものー」

看護師3「今度は逆の立場になるとは思っ

てなかつたんじゃない？ しかもこんなに早

くに」

看護師4「そうですよねエ。目が覚めないの

に毎日毎日……可哀想」

人の話し声(沢山の野次馬がいる的

感じの)。

病室のドアの開閉の音。

電子音(ピッピッピ……)。

丸椅子を力なく引きずる音。

花奈「雪斗……」

花奈「雪斗……」

せつない系の曲。

花奈「目を……開けてよ……」

掛け布団から手を出す音。

花奈「こうやって……雪斗の手を握っても、

私は温もりを感じることが出来ない……け

ど、雪斗は違うでしょ？（鼻をすする音）」

窓から風が静かに吹く音。

花奈「どうして……登山なんてしたの？ 凍傷で……しかも危険な状態って……本当に馬鹿なんだから！（泣きじゃくる）」

電子音が少し弱くなる（ピ……ッ、ピ……ッ）。

花奈「目を……開けてよ。雪ちゃんが居ないと……寂しいよ（鼻をすする音）」

雪斗「懐かしい、呼び方だな……」

花奈「雪……ちゃん……？」

雪斗「おう……久し振り。いつ振りだ？ 二週間ちよつとつてとこか？」

花奈「雪ちゃん……！」

丸椅子が倒れる音。

雪斗「おっと。いきなり抱き付くなよ……危ねーだろ。それに……身体中がいてーし」

花奈「あ……ごめん……」

雪斗「いって、いって。花奈の御蔭で目が覚めたんだ」

花奈「え？」

雪斗「声かけてくれてただろ？ それに……」

手も握ってくれてた」

花奈「あ……これは……」

雪斗「離さないでくれ」

花奈「でも……先生を呼びに……」

雪斗「話を遮るように）もう少しだけ、二人で居たいんだ」

花奈「しようがないな……雪ちゃんの甘えん坊は変わんないね……（くすくすと笑う）」

雪斗「花奈の面倒見の良さも変わってねーよ」

二人の小さな笑い声。

カラスの鳴き声。

花奈「もうこんな時間……そろそろ先生呼んでくるね」

雪斗「ああ、頼む……」

ゆつくりと歩く音。

雪斗「あ！」

足音が止まる。

花奈「何？」

雪斗「俺のリュックつて……」

花奈「リュック？ もしかして……これのこと？」

リュックサックを持ち上げる音。

雪斗「それぞれ！ ちよつと持って来てくれ

よ！」

花奈「いいけど……先生に診てもらうのが先だよ」

雪斗「大丈夫だつて！ な？ 頼むからさー」

花奈「しようがないなあ……」

ゆつくりと歩く音。

花奈「はい……」

雪斗「サンキュー！」

リュックサックのチャックを開ける音。

花奈「ねえ……それ何が入ってるの？ 重いよ？」

雪斗「これはな……溶けてなきやいいけど」

リュックサックから物を取り出す音。

花奈「それ……虫かごの中身」

雪斗「ほら。花奈が見たいって言った……」

雪の花！

花奈「雪ちゃん……」

雪斗「いろいろ調べたらさ……先週が雪の花が咲く条件が揃うってあったからさ、これはチャンスじゃねーの？ って思ってたさ」

虫かごを開ける音。

雪斗「花奈。手、貸して」

花奈「うん……」

雪斗「冷たいから気を付けろよ？」
花奈「うん……」

寒さを感じるような音(きらきらのな)。

花奈「綺麗……そして冷たい……」

雪斗「良かった……花奈の嬉しそうな顔が見れて！」

花奈「雪ちゃん……」

雪斗「なあ、花奈……感覚が戻らなくっても、一緒に学校行ったり、どっか遊びに行こうぜ？ 感覚に関しては俺がどうにかして伝えるし、それでも足りないなら……俺、もっと勉強して、表現力豊かにするから！」

花奈「雪ちゃんの手……温かいから、花……溶けちゃうよ」

雪斗「え？ あ、悪い……また無意識に手エ握って、た……(最後の方が小さくなる)」

花奈「雪ちゃん？ どうした……」

雪斗「話を遮るように」花奈！ 俺の手の温もりがわかるのか！」

花奈「え？ うん……この花の冷たさも……わかるよ？」

雪斗「俺！ 先生呼んでくる！」

勢いよくベッドから下りる音。

病室のドアを勢いよく開ける音。

クリスマスソング。

花奈「クリスマスツリー……綺麗だね」

雪斗「ああ、来て良かった。それも……花奈と二人つきりで、卒業旅行！」

花奈「ふふ……雪ちゃんに、キザな言葉は似合わないね(くすくすと笑う)」

雪斗「うう、うるせーな！」

花奈「似合わないから……いつも通りでいいよ。いつも通りの雪ちゃんが……いい」

雪斗「花奈……(間を開けてから)ちえ！

格好つけようとしたのによ……格好つかねーな、俺」

花奈「無理してつけなくて……いいのに」

雪斗「今だけは……格好つけたんだよ(最後の方に近付くにつれて照れる感じに)」

花奈「雪ちゃん……？」

雪斗「(間を開けてから)花奈……俺と、付き合ってくれ」

花奈「え……？」

雪斗「俺はお前と一緒に居たいんだ。お前の……花奈の笑顔を隣で、ずっと見ていたいんだ！」

花奈「(間を開けてから)私で……いいの？」

雪斗「花奈じゃなきゃダメなんだ！」

花奈「そっか……」

雪斗の心臓の音。

花奈「私じゃなきゃ……ダメなんだ……」

雪斗「そそ、そうだ」

花奈「私、雪ちゃんと違って身体弱いし、お

つむだつて弱くないよ？ 釣り合わないんじゃないかな？」

雪斗「そんなことね……つておい！ どきくきに紛れて、人のこと馬鹿にしてんじゃねーよ！」

花奈「ふふ……冗談だよ(楽しそうに笑う)」

雪斗「つたく……(溜め息混じりに)」

花奈「雪ちゃん……」

雪斗「ん？」

花奈「これからも……よろしくね」

雪斗「(間を開けてから)ああ、こちらこそ！」

花火が上がる音。

END